

議員先生のプレヒストリー

岡部昭彦

そのころ、伏見先生は前ぶれもなく編集室に姿を現しては私たちをあわてさせた。そのころというのは、名古屋から横浜へ居を移された先生の学術会議副会長時代である。都心での用をすまされての帰路にでも立ち寄られたのであるうか、夕方の時間が多かった。突然、編集室を急襲されたのは、受付け終了後の時間だったからとしても、先生は昼間でも受付け抜きで直接侵入におよぶ常習犯であった。いささか穏当を欠くことは遺いであるが、それは当時、内憂外患をかかえて招かれざる客に神経をつかっていた出版社側の言分であり、私たち編集者は気どらない先生の行動に親しみを感じていた。

そんなある晩、近所で食事をごいっしょした。ヨーロッパでの会議からお帰りになったばかりの先生は土産話に花を咲かせながら、テーブルの紙ナプキンに話題の外人学者

のスペルを綴ってくださるのだった。これも先生のくせの一つで、身近にある紙片れはなんであれ即座に「伏見メモ」に化けた。そして、それが翌月の『自然』誌のプランに化けるという思わぬ効能も時たまあった。「これを知っていますか？」と笑しげに先生は解説され、最後はあのかろやかな笑声にこちらもちり込まれるのを常とした。

その日は、あちらの某々物理学者の近況からバリの話になり、当然のように湯浅年子先生の動静へと転じた。伏見湯浅両先生は半年違いの同年生れ、しかも同学とあった。

「素通りすると、あとでお叱りを受ける」仲である。伏見先生は、赤いマントをひるがえした若かりし日の湯浅先生をのちに述懐しておられる。ご病気の話、ご馳走になったこと、いつしか東京とバリの時差はすっかりとんでしまう。

気安くものをいえるムードになってつい口にしたのは、湯浅先生への感謝の気持を具体的な形にしては、というある思いつきだった。科学者に限らず、バリを訪れる日本人は湯浅先生をなにかにつけて頼りとした。バリ生活三十年にもなる先生は、奉られた「民間大使」の名のごとく、バリの各方面にお顔が広がった。バリを知らない、フランス語をやつれない多くの日本人は、私をもふくめてずいぶんお世話になった。先生のお手紙には、いつも必ず「昨日は日本からこられた〇〇さんにお会いしました」とあった。ただでさえ多忙な日常であった先生の時間的、経済的

負担は小さくなかったはずである。

欧米在住の日本人は数あれど、かかるユニークな存在は湯浅先生ただお一人だったのではないだろうか。これに対しては個々人のレヴュルを超えた、国としてのなんらかの措置がとられてしかるべきであった。「それは、いい考えだ」と伏見先生がうなずかれたのには、すでにこの案が念頭にあってのことかもしれない。名誉教授クラスには珍しく、先生はこの種のことまでをよく覚えておられ、実行に移されるマメな一面をおもちだった。

それから、どのくらい経ったのか記憶にないが、一九七六年十月二十六日（火）の晩のことだったと思う。窓の外がとっぷり夕闇に包まれたころ、いきなり名前を呼ばれて頭をあげた。目の前に立つのは伏見先生である。やにわ「いま湯浅さんの紫綬褒章が内定しました」と細い目をさらに細めておっしゃった。嬉しさと感動が一挙にこみあげた。先生はやはり、この実現に動いておられ、吉報をわざわざもたらしてくださったのだ。

当時は、日本の大学や研究機関と無縁になった在外研究者への叙勲や授賞は、まだまだならない時代であった。先生は慣行や前例の立ちどころたる隘路を、人知れずあちこちにはたらきかけては、一つ一つ広げていかれたにちがいない。秀才の先生にかくされた、やさしさと地道ないま一つの素顔であった。考えてみると、これはだれにでもできる

ことではない、りっぱな、小さくも善意ある政治運動である。科学者参議院議員先生のかくれたプレヒストリーであった。

日本でのことがすんなりと運んだかどうかはともかく、無事内定に漕ぎつけることができた。ところが、バリの事情には曲折があった。バリといっても湯浅先生お一人の胸のうちだけなのに、それがまたややこしいとくる。明治生の先生ではあったが、東京からの一片の通知に感泣して、これをおしいたぐような大和撫子ではない。湯浅先生は実験家であるとともに大の理論家とあり、その手紙は綿めんと細やかで、電話は婉婉と続く。伏見先生との間にやりとりのあったことは充分に想像される。ところが、その余波が私にまで押し寄せたのにはびっくりした。

かつて湯浅先生が師の手紙を紹介された前例に倣って、バリからの一通の航空便をここに引かせていただく。

「……紫綬褒章の件も一つのやはり事件で、受章のために帰国する気があれば旅費を出す様にする、と文部省から電話でいって下さいましたが、右の様に忙しいのと（省略した前文のこと——引用者）健康の点で一寸ムリなので帰りませんが、折角骨折って下さったであろう方々（伏見さんも大変御推せん下さったらしく文部省で言っていました）にそのままではいいのかわからない

ので、甥に伏見先生に電話で御相談するように言いました。

私がいなくても皆さんに御披露する方がよいのか、来年帰るまでそのままだよいか判らないので、甥が一度代理で受けとり、適当に披露したあとはまた文部省へ返して、文部省から外務省をおしてこちらの大使館へ来て伝達式をするという事です。しかし、こちらの文化参事官の人も、一寸今までフランスにいる日本人の人でもあったという例が見当らず、見た事もないという居りますが、対応するものがない様でフランス語に訳すわけに行かず、日本の方にきいたところでは、紫は文部省として、他の色（褒章の黄、藍などをさす——引用者）も文部省だけなのか、そうとすればこちらの *Palmes Academiques*（教育功労賞——引用者）に当りますし、他も入れるとすれば *Ordre National du Merite*（国家功労賞——引用者）に当るのかもしれない、というわけです。

矢野健太郎氏の御名前も見えるので一寸フランス勢も多い様ですが、一種の年功者への慰労という感じで、果たして何が目的の章なのか余程どうかと思ったのですが、咄嗟に保井コノ先生（東京女高師での恩師——引用者）が御もらいになった折の御手紙に『折角推せんして下さった方の御厚意を無視しないでもらう様に、と

いつてくれた人があるので御受けする事にしました。とあったのを思い出して、電話で受けるかどうかきて来られた時、承知したわけです。又この事について、あるいは甥から御電話するかもしれません。では右まで」

湯浅先生の内なるものの起伏がうかがえるこの手紙の日付けは十一月十一日となっており、私が手にしたのは十七日のことである。いずれにしても、海を越えてのちょっと味のある授賞となり、その味つけの役に伏見先生が当たったという次第。

ふしぎに火曜日が関係する。湯浅先生は翌年八月九日（火）帰国、八月三十日（火）には、事実上のお祝いの会となった「湯浅年子さん歓迎パーティ」が国際文化会館で開かれた。会場には湯浅先生の流暢なフランス語のスピーチが流れ、笑みを浮かべて感慨にふける伏見先生の姿があった。十年一昔になる。

（科学ジャーナリスト）

次回配本予定（第五回）
第4巻 ろば電子

解説 江沢 洋
六月中旬刊 予価三〇〇〇円